

山正ニュース

株式会社 山 正		
本社・緑化部	岐阜市市橋4-5-15	Tel <058>271-4468
岐阜営業所	岐阜市市橋4-5-15	Tel <058>271-4466
可児営業所	可児市川合塚越345-1	Tel <0574>62-5228
富山営業所	富山県射水市大江207-1	Tel <0766>55-3882
飛騨営業所	高山国府町857-2	Tel <0577>72-4466

2012年10月号(通巻41号)

§ 1 農水省が平成24年産水稻の作柄概況を公表 ～岐阜、富山ともに作況指数100の「平年並み」となる～

農水省が9月28日に公表した平成24年産水稻の9月15日現在の作柄概況によると、全国の作況指数は102の「やや良」で、岐阜と富山はいずれも100の「平年並み」となっている。全国的にみると北海道や秋田を除く東北地域の作況指数が押し並べて103~107と高い一方、九州や四国地方の多くの県では96~99にとどまっており、北海道や東北地方の作況が全国の作況を押し上げている要因となっている。

一方、弊社管内の岐阜及び富山ともに作況指数100の平年並みで、10アール当たり予想収量はそれぞれ487kg、536kgとなっている。作柄表示地帯別では下図のとおりで、東濃の収量が若干多くなっている。なお、富山県の作柄表示地帯は昨年までは呉東と呉西に分けられていたが、今年度からは区域設定がなくなり、全県表示となっている。

今年は総じて天候に恵まれたことから、弱小茎の淘汰が進み、飛騨を除く各地帯で穂数が「平年並み」～「やや少ない」となり、結果として全もみ数も「平年並み」～「やや少ない」となったが、出穂期以降の日照時間が多かったため、登熟が「良」となり、最終的に平年並みの収量に落ち着いたものとされている。



図1 9月15日現在における水稲作柄概況(東海農政局及び北陸農政局ホームページによる)

— 水稲作況指数の決め方 —

「作況指数」とは10アール当たり平年収量に対する10アール当たり予想収量の比率のこと。農水省が毎年、生育状況に基づき、8月15日、9月15日、10月15日に公表するとともに、3月下旬には確定値を公表している(8月15日は概評のみで、指数の公表はなし)。

用いられる「10a当たり平年収量」とは、水稻の栽培を開始する以前に、その年の気象の推移や被害の発生状況などを平年並みとみなし、最近の栽培技術の進歩の度合や作付変動等を考慮し、実収量のすう勢をもとに作成したその年に予想される10a当たり収量のこと、いわゆる作況指数の基準値となるものである。したがって、平年収量が高く設定されている地域で収量の落ち込みが激しい年には指数の低下が著しいことになる傾向があることは否めない。

また農水省の収量の基準は玄米の粒厚が1.7mmの篩目上に残ったものとなっているが、実際の農家では、1.9~2.0mmの篩を用いて、粒厚の薄いものを除去して高品質米の生産に努めており、一部では作況指数で示されるほど収量がないとの声もある。なお、作況指数はあくまでも収量に関するものであって、品質面のことは考慮されていない。

(名畑技術顧問 北陸農政局&東海農政局のホームページを参考)

株式会社山正は、農薬・肥料・園芸ハウス・農業資材等の販売や、それに伴う農地・緑地・街路樹等のメンテナンス業務を通じ、地域農業や地域の環境緑地化への貢献を目指しています。

§ 2 コメについて考える③

～豊かな実りは日本の原風景。コメの重要性は変わらない～

今年の米づくりもほぼ終盤をむかえつつありますが、§ 1で述べたように、弊社管内の岐阜、富山では平年並みの収穫量が予想されており、病虫害や自然災害の被害も少なく、まずまずの稲作シーズンを終えることができるものと思われます。そして、早くも来年を見据えて土壌改良資材の投入や「秋耕し」などの土作りが始まっているところもあります。稲作はこのような連綿と継続する農家の努力の上に成り立っていることを強く感じさせる季節でもあります。

ところで、今年の8月16日の朝日新聞に今後のコメの消費動向に大きな影響があると思われる

「パン購入費、コメを抜く」という衝撃的な見出しの記事が掲載されました。記事によれば、総務省の2011年の家計調査で、主食のコメが家庭での購入で初めてパンに抜かれたとのことである。2人以上所帯（農林漁家所帯を除く）のコメ購入金額は前年比4.2%減の2万7777円で、パンは微増の2万8371円というのがその実態。ただし、スーパーやコンビニで買う弁当（おにぎり、すし類を含む）へは過去最高の2万8836円も支出されていることから、コメを食べなくなったわけではなく手軽に食べられるコメに対しては根強い人気がかがえる結果となっている。また、同記事で紹介されている社団法人JC総研による消費動向調査の結果では、家庭でコメを炊飯する回数が減った要因としてパンや麺類の増加によるものが最も多いものの、

外出や中食の増加などの要因も加わって相対的に家庭でのコメ購入額がパン購入費を下回ったものとされている。この記事の見出しはセンセーショナルであるものの、中身をよく見ると、日本人がコメよりパンを好むようになったのではなく、むしろ日本人の主食としてのコメの底力を感じさせるものという見方もできる。ただし、消費の動向に応じた柔軟な対応が今後ますます重要になってくることはいうまでもないことである。

いま一つ、日本人とコメの行く末について考えさせられる記事を紹介しておきたい。朝日新聞に掲載された天声人語（9月9日付）では、新米の出回る時期になぞらえ、お米の力を一番感じさせるのは「おにぎり」ではないかとし、関東大震災やこのたびの東日本大震災でのおにぎり、言い換えればコメが果たした役割の大きさを絶賛している。そして、おにぎりには、どんな環境のなかであっても、人を物言わず励ます力感と温かみがあり、その源は3千年にわたる日本人とコメの結びつきのゆえだろうとしている。

そして最後には、「コメはイネ科の一年草の実ながら、この恵みなしに日本の歴史も文化もなかった。自由化が言われているが、経済原則だけで米作りを追いつめたくはない。夏の青田、秋には黄金の稲穂。心の風景が、豊かな国土の上にある。」とのフレーズで結んでいる。まさに天声人語らしい結びであるが、新米がでまわるこの時期のひと時の感傷だけにひたるのではなく、とくに、経済原則だけで米作りを追いつめたくはないというくだりについては、瑞穂の国に生きるものとしてすべての国民が共有していきたい考え方といえよう。なお、コメについて考える；本誌通巻24号を①、再びコメについて考える；本誌通巻26号を②とし、今後も折に触れて記載していきたいと考えている。



朝日新聞 平成24年8月16日

§ 1 農水省が平成24年産水稻の作柄概況を公表

～岐阜、富山ともに作況指数100の「平年並み」となる～（名畑技術顧問）・・・1ページ

§ 2 コメについて考える③

～豊かな実りは日本の原風景。コメの重要性は変わらない～（名畑技術顧問）・・・2ページ